

カントの NOUMENA と先驗的自由に就て

木村 素衛

一

悟性認識の思索を終へるに當つてカントはこれを回想して次の様に述べた。「この國は併し乍ら一とつの島であり、その本性に依つて、變へることの出来ない限界に閉ぢ込められてゐる。それは假象の特有な場所である廣きそして嵐吹く大洋に依つて繞られたる真理の國(魅する名前)である。其處では多くの霧の堤と多くのあわたいしく融けて行く氷とが新しき陸地を偽り、そして發見に熱中する航海者を絶えず空しき希望を以て欺きつゝ、彼をば、そこから決して身を脱することも出来ず併しまた決して終りを遂げることも出来ない冒險に従事せしめる。」それではカントが斯く真理の島を繞れる大洋と呼んだノウメナとは如何なる概念であらうか。純粹理性批判の分析論の結果が「可能的經驗の原野を超えては何等の先天的綜合原理もあり得ない」と示すやうに、悟性は必ず感性に於て與へられる素材と綜合しなければ

ば經驗的認識を構成することが出来なかつた。かくの如くして生じた成果を彼は *Sinneswesen* (*phenomena*) と呼び、これに對して、感性に關係することなくして唯悟性のみに依つて可能なるところの對象を *Verstandeswesen* (*noumenon*) と名づけた。ノウメナのこの意味に従つて、私達はこれに二様の理解を持つことが出来やう。一とつはこれを非感性的直觀の對象として、即ち知的直觀或は直觀的悟性に依つて可能なるものとして取ることであり、他は單に私達の感性的直觀の對象でないものとして取ることである。考へ得べきこれら二様の意味の中、前者は積極的ではあるが、併し乍ら知的直觀の可能は理論的認識に於てカントが峻拒したところであるが故に、一とつの對象としてのノウメナの可能は、唯々悟性によつてのみ考へ得べきものとして成立するの外道がない。このやうに消極的にのみ可能であるこの概念は、それでは經驗的認識に對して、どう云ふ意義を持ち、どう云ふ關係に立つであらうか。先づ第一に、全然感官の對象ではなく、唯純粹悟性のみに依つて物自體として考へらるべきこのノウメナの内容は、經驗的認識に對して何等矛盾するところを有しない。第二に、此の概念は感性直觀を物自體に迄擴張せしめない爲めに、即ち感性的經驗の客觀的妥當性を制限する爲めに、必要であつて避けることが出来ない。この事からして、悟性

は、それ自身感性に制限せられないで、却つて物自體をノウメナと呼ぶことに依つて感性を制限すると云ふ意味で、ひとつの消極的擴張を獲ると考へられる。第三に、ノウメナは範疇の經驗的使用に取つて不可缺の制約である感性的現象の領域外に在る爲めに、それは私達に取つて内容の上からは全く空虚であり、理論的認識の立場からはこれに向つて何等の客觀的實在性をも *erkennen* することが出来ない。悟性はこゝでは單に *problematisch* に自からを擧げたのみであつて *assertorisch* な使用を全然斷念しなければならない。以上の三つの事柄はカントの概念規定に従へば正しく蓋然的概念の徴表に該當する。それ故にノウメナはかゝる概念として始めて理論性の立場からその成立の正當なる權利を獲る。かやうにしてノウメナの内容は決して氣隨なる詩ではなく。理性使用一般の整合の上から見て、殊に私達の只今の關心である經驗的認識に對して有するノウメナの意義と云ふことに關しては特に第二の點で著るしくその重要さの強度を積極的に指し示してゐるやうに、この概念が *Grenzbegriff* として有すべき批判的意義の重大が容易に看取せられるであらう。

純粹悟性はこれに依つて自個の積極的能力が經驗的使用に盡きると云ふ自覺を得、そして同時に他面に於て、この積極的使用の背後に、その洞察力の貫き通すことの出

來ない何ものかを消極的に意識するのである。

扱て私達の興味を引き立てることは、正しくノウメナ概念に於けるこの有様即ちそれが純粹悟性に依つて正當に成立を許され乍ら否寧ろ感性直觀の動もすれば陷り易き無智な僭稱を防ぐ爲めにそれに依つて要求さへせられ乍ら而もその積極的規定に關しては、純粹悟性の立場からは何處迄も *in unbekanntes Itzen* として規定を諦められたまゝで残されてゐると云ふことである。

よく知られてゐるやうに、ノウメナに對してカントは理論理性の立場を去つて實踐理性の立場からこれを道德的領域として積極的に規定し實在性を與へた。而もこの積極的規定を道德的にのみ限つた。私達の疑惑はこの最後の點に集注され、そしてこゝに問題を意識するのである。私は批判的と云ふことが如何なる意味に於て一個の哲學的態度であるかを考へ、そしてノウメナ概念が如何なる意味に於て批判的重要を有するかを今少しく立ち入つて考察し、而して更にカントがこの概念に積極的規定を與へた手続きとその意義とを理解することに依つて、少しくこの問題の解決に勉めて見度いと思ふ。其處から期待されるところを豫めこゝで述べることが許されるならば、ノウメナの積極的規定は單に道德的領域に限らるべきでな

く、批判的方法論の正當なる是認の下に、一般に文化價值の全領域として積極的に規定さるべきではないかと云ふことである。

二

カントはノウメナは物自體として考へらるべきであると云ふ。純粹理性批判の分析論ではかくノウメナと考へられ、その辯證論では先驗的自由に關して叡知的性格として取られ、そして實踐理性批判では實踐自由の領域として積極的意義を發揮して來たところの物自體の概念は、カント哲學に於ての重要な一個の歴史的論争の焦點を造つた。物自體を獨斷論的眞在として我に對立せしめて承認する限り、認識は必然的に模寫へ導かれなければならぬ。認識論上に於けるカントのコペルニクスの回轉は正しくこの方向の逆轉に在つた。また、獨斷論的眞在としての物自體が唯一の哲學的根本原理として成立する時、そこから如何にして知性が導き出されるかと云ふ、當然この立場に負はさるべき課題の解決が不可能に陥ることを、如何に鋭くフイヒテが指摘したかを私達は知つてゐる。(1) ツァラトウストラの駱駝が砂漠で荷物を振り落した様に、理性は永く人類の思惟に負はされたるこの傳承的負擔に

袂別を告げて、創造の自由 *Ich will* の獅子に變らなければならぬ。理性の自律の徹底がカント哲學の基調であり、また彼に依つて發足せしめられた新しき時代が深め行くべき方向であつたとすれば、獨斷論的意味に於ける物自體の許容は、批判的精神の忍び能はざるところでなければならぬであらう。それにも拘らず、純理批判の所々に、殊には感性論の初めの部分に於て、恰も物自體が感覺の原因として考へらるべきであるかの如き論述が残されてゐる。ヤコビの非難を想ひ浮ばしめるやうなこれ等の言葉を通して、私達は、多くの史家もするやうに、歴史の上の人としてのカントには、可なり濃き啓蒙的主知主義の陰影を拂ひ除く事が出来ないやうに、他面また獨斷的殘滓がいくらか溜つてゐたことを素直に認めると云ふことが寧ろ正しいことであらう。かくして彼の優れた後繼者達の中、例へば浪漫期の巨匠として我の深き自覺者であつたフイヒテは、物自體をば全き *Chinäre* であると云ひ、⁽²⁾ 理性の滲徹した體驗から、比ひなき體系の建設に出でたヘーゲルは、批判論に残されたるこの「陰影の幽靈」と呼んだ。⁽³⁾

成る程、獨斷論的自體は批判の精神を傷けることなしには、支持し得べくも見えない。併し乍ら、先驗的辯證論が示すやうに、可能的經驗の範圍を單に現象の世界に限

ると云ふことが、即ちこの半面に物自體の世界を確保して置くこと云ふことが、理性が自然的に陥つて行つた夫の形而上學的邪路からこれを救護するのに如何に重要な役割を演じたかを想ひ出すならば、また更には、純粹悟性の立場からは單に蓋然的のみ承認されたものが實踐理性の立場で客觀的實在性を與へられ、かくして前者に於けるノウメナとしての物自體が後者に於て實踐的な自由を資格づけられると云ふ意味が實踐理性批判の中で、明白なる口調を以て如何に屢々繰り返して語られたかを想ひ起すならば——物自體の概念は、よしんばこれを獨斷論の意味に於ける限り峻拒するとはしても、尙ほ批判哲學全體の中から追放さるべく餘りに重要な意義をカントその人の心の中に占めて居らねばならなかつたことに、氣附かされるのであらう。

それでは私達はこの概念を如何なる意味に於て正當に理論的立場から支持すべきであらうか。私は彼の哲學の全てに、あつた *Kritik der Vernunft* と云ふ事が如何なる意味に於て理性の批判であるべきかを理解する時に、物自體の概念をば彼自身ノウメナに就て述べる際に明らかにしたやうに限界概念として取ると云ふことが獨り批判的立脚地に矛盾しないばかりでなく、却つて極めて重要な意義を獲得して來

るべきであることを信ずる。限界の概念は、プロレゴメナの「純粹理性の限界決定について」が特に詳論したやうに制限(Schranken)が單なる否定であるに對して、ある積極的なものを含む。何故かなれば、既に述べたやうに、悟性は感性界を現象の世界として認識することに依つて、必然的に純粹悟性本質としてノウメナを思惟し、而して後者の性質規定に關する限りに於ては悟性は何事をも語り得ずして唯これを云はゞ空虚なる空間として残すに過ぎないが、而も限界それ自身は一面現象界に屬すると共に直ちに他面現象の總體の外に在るこの空虚なる空間に屬し、これに依つて悟性は單なる感性界の内に幽閉さるゝこともなく、またこれを出でゝ根據なき幻想に身を任すこともないからである。自個の能力の限界を知ることによつて悟性ははつきりした自個批判を成就すると云はなければならぬ。

ノウメナに就て、純粹悟性がそれに許されたる權限のみから語り得る事柄は正しく上述の限りに盡きるのであらう。私達は、併し乍ら、單なる經驗科學の基礎づけとしての批判哲學に取つていはなくして、一個の優れた文化哲學としての批判哲學の課題の全體に取つて有し得べきこの限界概念の意義に關して今少しく多くのことをば、——尤もそれは純理論的立場からでもなく、尙またこの知られざるエトワスを

積極的に顯現せしむるに足る正當なる方法論的立場からでもなくして、唯批判哲學そのものゝ任務の意義からして正當に歸結さるべき期待として、今少しく多くのことをば語り得ないであらうか。――

獨斷的自體のそれ自身に適はしき運命である倒潰は私達の philosophieren に何を齎すべきであつたであらうか。此處では一面哲學的對象が必然的に自我それ自身へ、生それ自身へ位置を回轉しなければならず、他面理性の批判即ち理性の自個批判と云ふ事の根本的意義でなければならぬところの自我の自覺、理性の自律と云ふ事が哲學的方法論の前階に迄高められねばならなかつた。知的直觀をば、カントがこの言葉に於て理解したところとは全く別に、我は作らきを遂行することに於て自からを直接に知ると云ふ作用の自覺と云ふ事に於て、唯一なる哲學的方法として提唱し、而してかくの如き私の自律的發展に依つてヘーゲルの辯證法を先驅したフイヒテをして、尙ほ、「私の體系はカントのと全く變らない」と主張せしめたるものは、根本的立脚地に於けるこの兩者の一致そのものでなければならぬであらう。コペルニクスの回轉が哲學全體に對して有する眞の意義は、對象と方法とに於けるこの覺醒に歸せられなければならぬ。「獨斷の夢」から醒まされたこの立場に在つて

は、獨斷的物自體と、此上に建設せられたる獨斷哲學の全結構とは、共に單なる *Gedankending* として評價せらるべきである。

直接なる生は意味を離れた單なる生起ではなく、意味に充實した價值生活である、而して生はそのあらゆる領域に互つて限なく反省を要求する。私達は、たゞ生きる事の事實に於て直接このことを確め得る。生はかくして必然に哲學を要求する、何となればそれは自覺を要求するからである。生のこの自覺への要求を眞理への意志と呼び得るならば、この意志の實現を外にして哲學はその意義を保つことは出来ない。哲學は直ちに生の生産者ではない、併しながらこれに自覺を與へるものは哲學である。かくして私達は謙讓に云はなければならぬ、——生は哲學の母である。併しながら、同時に確信を以て云はなければならぬ、——生をして自律に目醒めしむるものは哲學である。批判的態度とは、それ故に、先づ第一に生の尊重でなければならぬ。それが實現し且つ要求してゐる様々の特有なる意義の尊重でなければならぬ。生は哲學に取つて、單に見出だされたもの、或は單に與へられたものではなくして、これに負はされたる唯一の課題であり、かくて生の要求の基礎づけ、權利づけに於いて、*questio juris* にのみ關心しつゝ、生の意義を支ふる先驗的なるもの、價値的なるもの

鮮明に哲學は獨特なる學としての任務を自覺する。このやうな意味に於て、哲學はまた生がそれ自身の内面へ翻り還り行くひとつの方向である。生と哲學との接觸點或は前者から後者への旋回點は、生がその特有なる意義に目醒め、而してこれを要求する點に存在する。哲學はこの要求を *Aufgabe* として受け取らなければならぬ。こゝには無限に深き神祕がある。しかし乍ら、この要求、この課題は思惟に取つては一個の事實である。私達の哲學的精神が謙讓であり、またそれ自身に對して恭敬であり正直であるならば避け得られずまた變へ得られない事實としてこの課題は哲學に差し迫る。私達は、カントが純粹數學と純粹自然科學との學としての可能の證據を、それらのものゝ *Wirklichkeit* に認めた態度、悟性的認識に於て何等の論證もなくして形式と素材との對立をこの認識の制約として最初から呈出した態度、また實踐理性批判の冒頭に實踐的原則の定義を唐突に揭示した態度——これらの態度に於て批判的精神の生に對する尊敬を知り、而して生の要求が如何に哲學に向つて課題としてこれ等の事實を提供するかを見ることが出來やう。批判哲學はこれらの要求を素直に受け取り、そして認識に於ても道德に於ても自律的、先天的者を顯明して來た。爰では決して道德は理論的認識から導き出されはしなかつた。私達の *Denkweise*

に於て、淺き知の跋扈程、生を傷つけその理解を邪路に誘つたものはなかつた。批判的態度とは生に對する尊敬と共に知の正しき謙讓でなければならぬ。かくて生に於ける價値の自覺に於て、生と哲學とは互に滲徹し、深く抱擁する。生に於けるこの *das Vernünftige* の自覺こそ、あらゆる哲人の歩みを導いた北斗であり、この久遠なるものゝ懂れこそ、これらの人々の内なる血戰を屬ました方である。

批判哲學の本質がこのやうに理解され得るとすれば、限界の概念はまたこのやうな *philosophieren* が必然的に伴つて來るべきところであることが明らかであらう。

何故かなれば *rationalisieren* を遂げ得たる生の一とつゝの領域の外、或は背後には、この世界を開き得た限りの理性の洞察を超ゆるものとして、自我の無限の闇夜の暗黒に包まれたる生の限りなき神祕が、ひそまねばならないからである。而して、自覺の更に廣き擴張、自律の更に深き徹底を衝動し、かくして理性批判の更に大なる國土を開拓せしめるものは正しくこの限界の意識でなければならぬ。眞理への意志の實現の尖端はこの *Grenze* の意識に於て作らんと云へる。ヘーゲルが *„dass das Wissen von Grenze nur sein kann, insofern das Unbegrenzte diesseits im Bewusstsein ist.“* (3) と云つたやうに、含蓄的な無限のないところには限界の自覺は育くまれやうはないであらう。限界を定

めると云ふことは、殊に知の僭主的專制である主知主義に對して有する批判的方法の優れた特長である。それは、生のもろ／＼の領域に於ける獨特なる固有なる意義の尊重であり、そしてこの事こそ、文化哲學としての批判主義の比ひなき卓越である。

——ウーケンデルバントが批判主義を單に一個の文化哲學としてのみでなく、唯一の文化哲學(*die Kulturphilosophie*)として承認したと云ふことも、(6)批判主義に於けるこの特性に基づくと考へ得るであらう。一面から見れば理性の批判としての哲學は、かくの如くして、限界確立の過程とも云はれ得なければならぬ。ジムメルがゲーテの本質が統一(*Einheit*)であるに對し、カントのそれは *Grenzzetzung* に在る、(7)と評したのは、寧ろ批判的精神に適はしき言葉である。併し、私達は限界の決定は統一を要求する理性の全的活動の飽く迄清澄にして良心的なる眼を豫想してゐることを看過してはならない。ものゝ境を立て分つと云ふことは、これに、先き立つ全體的統一の體驗を豫想し、後者は却つて前者に依つてその意識を確められ且つ深められ、これに依つて統一は眞の自覺的な緊密に迄高められるのである。メフイストは思索者を嗤つたけれども、思索は却つて青草を食むものにのみ許さるべき特權であらう。

單に純粹悟性のみが承認し得た限りの限界概念としてのノウメナも、積極的内容

に關しては全然空虚なるこの空間の何等かの方法に依る可能的充實に就て、既に私達の思索的要求に衝動を與へた。今や、併し乍ら、批判哲學の意義が上に述べたやうであり、従つてノウメナとは未だ理性の是認を受けざる單なる種々の要求としての生そのものであると云ふことが許されんとするならば、私達は、更に進んでその積極の規定に關して、批判的方法に基く充分なる考察を遂ぐるに先き立つて、豫め此處で一とつの正當な期待をこれに向つて掛けることが許されるであらう。――

自然の世界は嚴酷なる自然律に依つて普ねく規定せられ、一個の例外をも許容せざる必然的領域である。生に就ての如何なる關心と雖も、この世界そのものを恣に變化することも否定することも出来ない。悟性は自然をかくるものとして極印づけて了つたのである。それ故に若し自然が唯一の可能的世界であるならば、深き自由に基く藝術、道德、宗教等は悉くその獨立性を失ひ、根據なき單なる假現に陥らなければならぬであらう。自然科學的方法にのみ依つて全てを理解しやうとする人々は、發達した姿に於て、いあれ或は素朴なる形に於て、いあれ、原理的に悉く唯物論的決定論に陷ることを餘儀なくされる。彼等に取りつては宗教も道德も藝術も彼等の生活に對して從屬的な意義に於ていくらか役に立つものか、さうでなければ、人間生

活に於ける自個欺瞞として、全然その價值を否定せらるべきものですらあつた。ここでは希望と熱情との生活者は悉くドン・キホーテであり、冷靜なる目醒めた生活者の辿るべき道は「父と子」のバザロフのその外はないであらう。それ故に、もし自然の立法者であり、その限りまた自然の創造者、ヘーゲルの言葉を思ひ起すならば「陰影の王國」の王者である純粹悟性が、自然認識の外に「知られざるエトワス」としてノウメナを承認し得ないとすれば、藝術道德、宗教等はそれらが充分なる自律を以て成立すべき可能的領域を失ひ、これらのものゝ實在性は人々の憶説或は單なる信仰たるに止まり、かくして自然のみが唯一の可能的實在領域としてその眞理性を保つ限り、これらのものゝ實在に關する眞理性は自然必然と矛盾することなしには絶對に容れらるべき餘地がない。私達はそれ故に今や純粹悟性の意義深きこの限界の自覺に依つて、自然がその領域では否定しなければならぬこれらのものゝ救護と權利づけとをノウメナの領域に於て期待することが出來やう。それでは、このやうな私達の期待をば充分なる批判哲學的方法に依つて實現せんと欲する私達の企てに對してカントは如何やうに私達を手引きするであらうか。ヘーゲルが「生あるものは生なきものに對して苦しみの特權を有する」⁽⁸⁾と云つた如く、この言葉の崇高なる意義

616 を今私達は *Leben* を Philosophieren の間に會得するものであらう。

註

- (1) Fichte, Erste Einleitung in die wissenschafts-
lehre, I, 2, 3u. 5 (Fritz Behnandt Verlag, Fichtes-
werke, III)
- (2) Ib. S. 15.
- (3) Hegel, Logik, I, S. 32. (Verlag von Diederich und
Hannlot, Werke III)
- (4) Fichte, Erste Einleitung, S. 4.
- (5) Hegel, Encyclopädie, S. 88. (Phil. Bib.)
- (6) Windelband, Kulturphilosophie und transzendentaler
Idealismus, (Prüfungs, II, S. 289.)
- (7) Simmel, Kant und Goethe S. 48.
- (8) Hegel, Encyclopädie, S. 85.



限界概念としてのノウメナの積極的展開を企圖するに當つて、先づ私達に指針を與へるやうに見えるのは、理論理性から實踐理性への移り行きに於て極めて重要な役目を演じたところの先驗的自由の概念である。先驗的自由は、統制原理として批判哲學から肝要な意義を附與せられた宇宙論的理念に關して生じ、而してカントに依れば、他の先驗的理念と共に、自然概念から實踐的概念への移り行きを可能ならしめ、道德的理念に向つて理性の理論的認識との連結を與へるものであり、⁽¹⁾またその廢止は同時にあらゆる實踐的自由の滅盡を意味するところのものであつた。⁽²⁾それ

では先驗的自由とは如何なる理念であらうか。

カントは因果性に二つの可能を承認し、一を *Kausalität nach Natur* と名づけ、他を *Kausalität aus Freiheit* 或は *Kausalität durch Freiheit* 呼んだ。前者は經驗界を構成する範疇としての因果律が意味するところのものであつて、現象の世界のあらゆる事物はこの法則の下に鐵の如き必然性に拘束せられて成立する。それ故に、「現象が物自體であるならば、自由は救護せらるべくもない」。(a)ノウメナの成立は、其であるから、獨りアンチノミーからの脱却と云ふ、理論理性に取つての重要を有するばかりでなく、實に自由の救護と云ふ計るべからざる重要を任務づけられてゐる。かくして先驗的自由と呼ばれるところの、この「自由に依る因果性」は、取りもなほさずこのノウメナの自由(*causa noumenon*)を意味する。而してカントが與へた概念規定に従へば、それは「自然法則に従つて經過するところの現象の系列を自づから始めると云ふ、原因の絶對的自發性」(b)に於ける自由である。従つてこの原因は、必然的法則に従つてこれに先行する他の原因を有することなく、超時間的なノウメナに於て成立するところの *intelligibele Ursache* (c)であり、而してそれはその結果をば現象界に於て有するのである。併し乍ら、先驗的自由に於て私達が確め得るところは、唯これが理論理性の正

當なる權限内に於て設立せられる限りに於ては、何等その Wirklichkeit に就ては、
 なく、單なる先驗的理念として蓋然的にこれを承認すると云ふことが理性の理論的
 使用に於ていさゝかも矛盾を含まないと云ふことだけに留まる。而してこの自由
 の實在性に關しては、カントはこれを實踐理性批判に於て道德律の確立に關して *duzieren*
 し、理論理性の立場では單なる理念として蓋然的にのみ取られ得た自由は、
 實踐理性の領域に於て實踐的自由として *assertorisch* になり、實踐的實在性を與へられ
 得ると爲した。即ち單なる理念としての「自由に依る因果」は實踐的立場に於て一つ
 の實在性を獲得し得るのである。因果に關するカントの上の如き考へは、私達をし
 ておのづからこれに對する三つの適用に氣附かしめる。第一はその經驗的使用で
 あり、第二は先驗的自由としての使用であり、而して第三は實踐的使用である。私は
 此處では特に第二の使用に注意を集めて、それが私達に取つて何を意味するかを考
 察して見度い。

先づ第一の因果概念の經驗的使用に於ては、この概念は直觀形式と結合しなければ
 經驗的認識に於て何等積極的意義を有することが出来なかつた、他の言葉で云へば、
 純粹悟性概念としての因果の概念は *Schematisieren* せられて、そして唯この事に依つ

てのみ始めて範疇として經驗的認識に役立つたのである。理論的使用に於ては、一般に範疇は感性との結合を外にしては、絶対にその積極的使用を禁ぜられてゐた。かくのごとくして單なる Grund und Folge から區別せられて、Kausalität が Ursache und Wirkung として特に經驗認識の構成原理としての權利を得ることが出来る限りに於ては、此概念から時間上の前後の關係と云ふ徵表を奪取するとは許され得ない。因果概念の理論的積極的使用はかゝる意味に於ての外行はれ得ないのである。而してこれに對して他方に、第一批判の一部分及び特に詳細には第二批判の「理論的使用に於ては可能ならざる擴張に對して實踐的使用に於ける純粹理性が有する權利に就て」と云ふ章に於て論せられてゐるやうに、カントは、因果概念は純粹悟性のみから得られた概念であつて、それ故にそれ自身には時間的制約をばその使用の必然的制約とするものでなく、これを物自體或はノウメナに關して適用すると云ふことは、——成る程こゝでは何等感性と結合することが出来るのではないから、經驗的認識を構成することこそ出来ないとは云へ、——それ自からには併し乍ら理論理性の立場に於て何等矛盾するところがないと云ひ、更に、それ故に、因果概念のノウメナに於ける使用は、理論的立場ではその認識を毫も擴張することが出来るのではないが、併し實

實踐的立場では、實踐的自由に實在性を與へ得ることゝ關連して、因果概念のこのやうな使用が積極的可的を確められ、かくしてこの概念の實踐的な意味に於ける限りの擴張が遂げられ得ることを述べた。而してノウメナに關する因果概念の積極的適用がかやうに實踐的にのみはつきり限られると同時に、他方第一批判に於ては實踐的と道德的との兩概念の概念規定に關して動搖するところが認められたにも拘らず、第二批判に於ては例へば、ノウメナの原因性について「私はこの概念の實在性を規定するところの道德律に關しての外はこの概念について何等他の使用を爲す權利があるとは考へない、換言すれば唯々實踐的使用を爲す權利があるのみと考へる」⁽⁶⁾と彼が述べてゐるやうに、カントは明白に實踐的とは即ち道德的であることを宣言した。このやうにして因果概念の積極的使用は唯二つの場合にのみ、即ち一つは圖式と結合して經驗的使用に、他はノウメナに關して超時間的に、實踐的即ち道德的使用に確定せられた。扨て私達に残された因果概念の消極的使用即ち先驗的自由に於けるノウメナの因果性は一面理論的であると共に他面超時間的である。それ故にこの場合は前者の面に於て經驗的使用と、そして後者の面に於て實踐的使用と共通性を有しつゝ、これ等二つの積極的使用とは全然特有なる姿を呈して來る。私達は

これに對して如何なる理解を有すべきであらうか。

Kausalität が單なる Grund und Folge から區別せられて Ursache und Wirkung と成り得るのは唯それが圖式と結びつくことに依つてのみである。それ故に理論的であると同時に超時間的であるところの因果性は原因結果の關係から區別せられて根據と歸結とのそれに留まらなければならない。私はカントの causa noumenon をば根據と歸結との關係として、どこ迄も、經驗認識の範疇であると原因と結果とのそれらを區別すると云ふことが、このノウメナの因果性と呼ばれるものゝ理解に第一に必要であると考へる。それにも拘らずカントがこれを自由による「因果性」と呼んだことについては、原因と結果と云ふ關係がこの概念の本質からして常に綜合的關係を意味し、これに對して根據と歸結が普通分析的關係を意味するやうに使ひ慣はれてをり、而して先驗的自由の場合には云ふ迄もなくノウメナと現象との間に於ける綜合的關係を現はすのであることを思ひ浮べるならば、尙また Kausalität と云ふ關係がカントに於ては dynamische Kategorie として、常に異質的なものゝ綜合に關する概念であつたことを思ひ起すならば、カントが尙こゝに「因果性」と云ふ言葉を用ひた事には充分な理由を見出すことが出來やう。扱て先驗的自由の意味する關係がノウメナ

と現象との間に結ばれる根據と歸結とのそれであるとしても、それは如何なる意味に於ての根據と歸結であらうか。その綜合的關係は如何にして積極的内容を規定せられるであらうか。併し乍ら、私達はこの間ひを意識するよりも先きに、悟性が確立し得たところの自然必然の體系に對して、この必然性に拘束せられないと云ふ自由原因を、その積極的規定は尙ほ明らかでないとしても、唯消極的にのみでも考へると云ふことそれ自身が、悟性の立法を破壊しはしないであらうか、——現象界に存する一つの對象が悟性の立法に従つてその原因を現象界に於て有すると同時に他方直ちに超感的世界に於てノウメナの自由による原因を有すると云ふ事が、何等の矛盾も破綻もなく成立し得る事であらうか、と云ふ疑惑に遭遇しなければならぬ。何となれば單にノウメナを考へると云ふことが現象界の成立に矛盾しないと云ふこと又は既に私達が確めたところであるが、尙その上この兩者の間にかやうな因果的關係が許され得ると云ふことに對しては私達は未だ充分な吟味を行つてゐないからである。私はカントに於けるこの問題の解明から進めて前問即ちかの根據と歸結の積極的規定の解決へ移つて行き度いと思ふ。

カントはこの問題を intelligibler Charakter 〆 empirischer Charakter 〆を考へることに

依つて解き明かした。審知的とはカントの定義に依れば、感官の一つの對象に於てそれ自身現象でないところのもののである。それ故に感性界に於て現象として成立するものが、それ自身に於て感性的直觀の對象でなくして而も現象の原因であるやうな能力を有するとすれば、このものゝ因果性は二つの側から、即ち一面その作らきは審知的であつて物自體に於ける原因であり、他面その結果は經驗的であつて、その原因をまた感性界に有する、として考へられる。かやうにして此處では、審知的性格に就て、その何者であるかに關して積極的規定は洞察さるべくもないけれども、併し感性を超越せる能動的本質として「彼れ自からの中に作らきが始まることなしに、感官の世界に於てその結果を自づから始める」(dass es seine Wirkungen in der Sinnenwelt von selbst anfangt, ohne dass die Handlung in ihm selbst anfängt)と云ふことが全く正當に語られ得る。かく一つの感性的對象が二様の因果性の下に成立すると云ふことは、一つの原因が超感界に於て作らくことに依つて、時間的制約の下にのみ効力を有する他の原因に何等の干渉を行ふことなく、また後者は唯々時間的制約の下にのみその權利を獲得してゐるものであるが故に前者の自由をいさゝかも毀損することなく、従つて兩者の間に何等矛盾も衝突もなく、正當にその可能性が是認せられなければ

ばならぬ。單にこのとが可能であると云ふに留まらず、現象に向つて *transcendentaler Gegenstand* がその根柢に考へられなければならない。「また經驗的性格に應じて審知的性格が考へられねばならないであらう」とカントは告げる。私達の問題である「自由に依る因果性」と自然必然性の普遍的法則との結合の可能性は丁度かくの如き項目の下に、上の如く答へられた。而して兩者の結合のかやうな一般的可能の是認に對して、その具體的積極的な一例としてカントは「人」と云ふ概念を持ち出した。人は自然に屬する存在として經驗的性格であると共に實踐的本質としては審知的性格であり、かくして私達の行爲は自然的生起なると同時に道德的意義を獲得する。こゝで明らかであるやうに、知られざるものとして殘されて來た先驗的自由の積極的規定の一つとして、實踐的自由が數へらるべきであることを私達は知り得る。併し乍ら、この事に關して特に私達の注意を引く事は、第一批判では實踐的自由が上の如く先驗的自由の一例として語られてゐると云ふことゝ、實踐的と云ふことが決定的に道德的と云ふ意味と同一の *Umfang* に於て取られないで後者よりも廣く考へられ、屢々 *Willkür* なる文字がその意味を現はしてゐると云ふことである。

然るに第二批判に於ては決截的な明らかなさを以て、例へば「……純粹理論理性のあら

ゆる理念の中、よしんば實踐的認識に關してのみであるとは云へ、超感的なるものゝ
 原野に於てこのやうに大きな擴張を齎らすものは獨り自由の概念のみである……
 と述べられてゐるやうに、先驗的自由の積極的規定は唯々實踐的自由に限られ且つ
 これに依つて盡くされてゐる、而してこゝでは既に明らかにしたやうに實踐的と云
 ふことは常に道德的と云ふことゝ一致した。かやうにして理性の理論的使用に於
 ては單に蓋然的であつた自由は、繰り返してカントが第二批判の諸所で強調したや
 うに、道德律の事實から權利づけられて、確然的に實踐的自由と認められた。即ちカ
 ントに依ればノウメナの因果は道德的自由に依る行爲の原因性を意味することに
 なつた。扨て一つの行爲が行爲として客觀的に成立する爲めにはそれは全然自然
 必然に従つてゐなければ不可能である。全然その成立が自然必然であるものが實
 踐的自由の結果として、換言すればノウメナの原因の現象界に存在する結果として
 見られると云ふことは、それでは如何なる意味であるであらうか。

こゝ迄私達の探索が辿りつくとき、判斷力批判の序論の終りの部分に現はれてゐ
 るカントの論述がくつきりと私達に思ひ出されて来る。それに依ればカントはこ
 の超感的なるものと現象との間に於ける因果をば、明白なる表現を以て、目的とそ

實現とに於ける根據と歸結として考へた。——自然に向つて先天的に立法的なる悟性と、自由に向つて先天的に立法的なる理性とは、その本質に従つて、相干渉することは元より許さるべくもない。それ故に感性的なるものが超感的なるものを規定すると云ふことは勿論、尙また、こゝでは實踐的自由であるところの後者が前者に向つて、自然の認識に關する限り、これを規定する事は出来ない。併し乍ら、超感的なるものは、感性的なるものをその *“Töge”* として規定することは可能である。而してこのことは結果を現象界に有すると云ふ夫の先驗的自由の概念に既に含まれてゐることであつて「原因と云ふ言葉は、超感的なるものに就て使用されては、唯々 Grund を意味するに過ぎないのではあるが、^(a)自然事物の因果性を現象界に於ける一つの結果に就て、一面、自然律に従つて、而して他面、これと同時に實踐理性の法則の形式的原理に一致するものとして、規定することが可能なのである。——かくの如くカントは考へた。而してこゝに云ふ自由の概念は目的それ自體としての道德的意志に外ならなかつた。このやうにして今や私達をこの探索に出發せしめた問題に答へらるべき時が來た。即ち、先驗的自由がノウメナの因果性として現はすところの根據と歸結とは目的とその實現に於ける綜合關係であり、そして歸結である現象界の根據

の、即ち悟性の立場からは單に消極的に思惟せられたノウメナの、積極的規定は目的であり、カントに依ればそれは終局目的としての道德的自由そのものである。而して終局目的とはその可能性の制約として他の何ものをも必要としない目的であり、即ち自個目的であり、そしてカントが終局目的に於てこゝに理解した理性的本質の實踐的自由は單に感官の世界に於ける規定原因から不依であると云ふ消極的意味の外に、積極的に自律を本質とした。自律的なるもの、自個目的々なるものはまた必然に實現を要求する、自然との結合を要求する。實現への要求を離れて目的と云ふことは理解しやうもない。併し、かく自然が、理性に對して合目的々に結ばれると云ふ時、かゝる意味に於て道德的意義を得た自然の實踐的實在性は、一見左様に感ぜられ易いやうに、悟性の必然的立法の下に確立せらるゝ自然の實在性に比し客觀性の度が弱いのではないであらうか。このやうな一見起り易き疑問は、自然そのものゝ自然としての實在性が、カオスとして見出だされたる素材に對する、唯々悟性それ自身の立法に依つてのみ與へらるゝことを思ひ浮べるならば、直ちに解決せらるべき事柄である。先驗的自由に就て、カントはまた *die Idee von einer Spontaneität, die von selbst anheben könne zu handeln*、⁽³⁾と述べ、また、行爲をば「審知的性格の直接の結果」⁽⁴⁾である

ると云つたやうに、自然が道德的意義に於て見られると云ふことは、單に自然をある視點から見なほすと云ふことではなくして、實に道德的實在界を「創造する」⁽⁴⁵⁾と云ふことである。その實在性が有する客觀性の度合に於て、道德的實在性のそれに對して主張し得る權利が後者が前者に對して爲し得るそれよりもいさゝかも弱いのではないばかりでなく、今の私達の問題ではないが若しある正當なる方法論的立脚地から、實在の種々の相を權利づけるものゝのアプリオリの體系を論ずることが許されるやうな場合には、恐らく自然的實在性は却つて道德的實在性の抽象的、低次の一面とすら、正當に評價されるであらう。

上の如く私達はカントの思想を辿つて來た。これからの私達の考察の出發點となるべき、その重要な結果を回想すれば次のやうにならう。ノウメナは純粹悟性に依つて悟性本質として成立し、限界概念として批判的重要を保ち、感性的制約を受けない領域として殘されつゝ、その積極的規定はこの立場からは斷念せられた。而して一方理論理性がその權能の正しき使用の範圍に於て先驗的自由を許したとき、それはノウメナの因果性として立せられたが、尙ほその積極的規定即ちこの自由が有し得べき自律性の内容に就てはこの立場からは語られ得ざるものとして諦められ

た。併し乍ら、實踐的立場に於てはノウメナは實踐的目的それ自身の領域として積極的に顯明せられ、先驗的自由はまた實踐的自由として積極的に規定せられ得た。寔にカントに於ける實踐理性の優位は、その能力の理論理性のそれに對するこの優越に於て認められたのである。理論的に不規定的なものゝ實踐の規定に關するこの思想は第二批判が明らかにするところであるが、其處ではこの可能的積極的規定は實踐的にのみ限られると主張せられ、そして實踐的とは唯々道德的であると考へられた。カントに對する上の如き理解が若し許されるところならば、私達の疑惑と考察とは正しくこの最後の點に集中せられて來るであらう。果してかの積極的規定はこれに盡きなければならぬであらうか。盡きねばならない理由が果してカントに依つて示されてゐるであらうか。この問題の解決は、カントに於けるこの積極的規定の手續きそのものゝ理解と吟味とに求められなければならない。而して私是否！へ導かれた。私達は、先づ彼の取つたところの、そしてまた私達が理解した限りに於ては正しく批判的方法が取らなければならないところの、その手續の吟味から始めよう。

ノウメナの積極的意義が純粹實踐理性であると云ふことは、後者が蓋然的、不規定

的なる前者から理論的分析に依つて導出せられることに依つて成立したのではない。純粹悟性の權能は、自然認識を終へると同時に、その背後に、或は恐らく更に正しくはその根柢に、限界概念としてのノウメナを蓋然的に思惟し、可想的なもの、制約せられざるものゝ領域としてこれを „leerer Platz“ として殘し得たのみであつて、これを „realisieren“ すると云ふことは悟性には全然許されない。この立場からは、此の概念から何ものをも積極的に分析し出だす事は出来ないのである。純粹悟性に於けるこの限界の自覺と、この謙讓なる慎ましやかさとこそ、批判主義を主知主義の僭主的誇稱から救ひ、理性を眞の自覺に導き得るのである。ノウメナに於て不可知なる國を見出した眞理への意志は、今や更に深き自覺のために直接なる生そのものへ歸る。そして端的に生きることによつて „philosophieren“ を遂げんとする。批判主義のこの態度こそ、これをして哲學的方法の王座に價せしめるものである。上なる星の輝く空と、内なる道德律とに對する、限りなき感歎と崇敬とを以つて心を満たされたる人カントは、今や單に理論的に考ふことから身を翻して、道德的意志そのものとなつて生き切り、而してその „erleben“ それ自身に於て、永劫を實現すると同時に、永劫を體得しなければならなかつた。道德的意志は自律である。何となれば、——それ

は自律であるからである。カントが、かの純粹悟性の *herer Platz* を *realisieren*, したの
 は、道德律の “*Faktum*” に依つたのであつて、他の何ものに依つたでもない。實踐理
 性批判の仕事は、生としての道德的生活の要求をば、どこ迄も生活それ自身に於て正
 直に徹せしめ、その當に在らんと欲するがまゝに赴かしめ、而してかくすることに依
 つて、そして唯々かくすることの中に、生をしてそれ自からの姿を自覺せしめること
 の外はない。これが實踐理性の自個批判であり、要求の權利づけとしての先驗哲學
 の *philosophieren* でなければならぬ。かくの如く考へるならば、實踐的自由の基礎づけに
 は理性の理論的權能は何等の助力も寄與も行はないことゝならなければならぬ。
 カント自からも「先驗的自由に關する問題は單に理論的知識に關するだけである。
 實踐的なものが問題である時には、前者は無關係なものとして除けて置くことが
 出来る」⁽⁶⁸⁾と云ふ。それにも拘らず一面カントに取つては理論理性の概念である先
 驗的自由は、實踐的自由への移り行きを可能ならしめ、⁽⁶⁹⁾ また前者の潰倒是後者の盡
 滅を意味する⁽⁷⁰⁾ものであつた。二つの自由の關係に對する、一見矛盾するやうにも
 見ゆる、カントのこの二つの態度は、併し乍ら、共に正當でなければならぬ。私達はこ
 ゝで道德律の權利づけ、實踐的自由の基礎づけと云ふ問題と、道德律の遂行、實踐的自

由の實現、換言すれば道德的價値の *Verwirklichung* と云ふ問題とを明白に區別しなければならぬ。單に道德律の權利づけ、實踐的自由の基礎づけのためには、先驗的自由は無關係であつてよい。たとへ悟性がかのノウメナを思惟することが出來ず、先驗的自由を承認することが出來なかつたとしても、意志の自律性の權利づけに影響はあり得ない筈だからである。この間に影響を許すことは、理論理性の立法と實踐理性のそれとの間に、干涉の交換を許すことを招致しなければならない。而して何よりも先きにこの事は悟性の自然に對する立法權を動搖せしめ、また實踐理性の自律の毀損を意味しなければならないであらう。それ故に實踐的自由の實在性の確立に關する限りの場合では、あらゆる點から理論理性の手助けを必要としない、この限りに於けるノウメナの積極的展開そのことには、先驗的自由は何等の役割をも負はされないのである。併し乍らそれにも拘らず先驗的自由が實踐的自由に對して密接にして重大なる關係を有すると云はれねばならないのは、道德的意志の實現の可能に關してである。抑も純粹悟性の權能がノウメナを「空地」として承認したと云ふことが既に理性活動の全體と云ふ觀點から見て實踐理性の他からわづらはされない獨立と安住とのために大なる貢獻を功績づけられてゐなければならなかつた。

何となれば、よしんば實踐的領域の權威が上の如くしてそれ自身の本質に従つてそれ自身に依つて基礎を與へられたとしても、もし純粹悟性が確認する世界が單に必然のそれに止まり且つ限られるとすれば、可能的なる而して同等なる自己主張の權利を有する二つの實在領域必然と自由とは、勢ひ矛盾と衝突とに陥ることを餘儀なくせられるであらうのに、かゝる空地ノウメナが粹純悟性から認められて在るがために、實踐的領域と些も矛盾衝突なくして自個の獨立し安住すべき場所が與へられ、かくして理性活動の全體に於て調和が保證せられ得るからである。併し乍ら、更に進んでノウメナと現象界との間に何等かの可能的結合が許されないとするれば、實踐的價值がたとへノウメナを積極的に満たしたとしても、それが現象の世界に於て實現されると云ふ可能性が、換言すれば具體的な道德的行爲の可能性が基礎づけられ得ないことにならなければならぬ。かの容知的性格と經驗的性格との結合が認められなかつたとすれば、超感的實在としての實踐的自由は自然と結合して行爲として實現される道を全く斷絶されるの外ないであらう。先驗的自由が實踐的自由に對して有する意義の重大さは全くこの點に存在するのである。かくの如くしてカントの云ふ如く理論的に蓋然的なるものが實踐的に確然的となると云ふことは、ノ

ウメナから分析さるゝ事に依つてではなく、それとは全く獨立に、道德律の事實そのものに基いて積極的に實在性を得る實踐的領域に、ノウメナに於て場所を與へると云ふことが、理性の世界の秩序と調和とを亂す憂を伴ふことがなく、また目的自體とその實現と云ふ關係に於て本質的に自然との結合を要求する道德的意志の因果性をば、超感覺界と現象界の結合を自由による因果性の名稱の下に許容するところの先驗的自由に於て位置づけると云ふことが、同じく理性の世界の秩序と調和とを亂すことなくして、各々にその特有なる意義の實現を可能ならしめると云ふことである。ノウメナから實踐的領域が生れ出づるのでもなく、先驗的自由から實踐的自由が生づるのでもない、かゝることは云ふ迄もなく不合理に外ならないのである。それ故に、理論的に不規定なるものゝ積極的規定の手續が上の如くにして行はれ、そしてそれが主知主義や獨斷論から區別さるゝ批判主義の良き特長であるとするならば、私達は私達の問題である可能的積極化の領域を道德的にのみ限定すべき何等正等なる理由を發見することは出来ないであらう。かくの如き限定の必然的理由は、積極的規定の分析的導出の場合には、ある條件の下に原理的に期待することが許されるであらうが、今の如き事情の場合に於ては絶對的に不可能でなければならぬ。何と

なればノウメナの領域は無限であり、而もこれを満すものは、この領域が支持さるゝ理論理性とは他の根據から來るのであるから。ノウメナの規定が實踐理性に盡きると云ふことはカント自からも唯主張したのみであつて、その必然的理由を論證はしなかつた。かくの如くして私達は今やカントの精神を毫も傷けることなくして、次の如くに云ひ得るであらう。若し實踐理性の外に尙ほ自然必然の拘束から自由であつて、而も實踐理性とは別に自律性を本質とする目的自體があるならば、それは正しくノウメナの積極的規定たり得、而して更にこれらの自律的なものがその本質に従つて實現としての結果を自然界に於て有すべき限りに於て、これらはまた先驗的自由の積極的規定でなければならぬ。而して私達はかゝる目的自體を道德的以外になほ藝術的、認識的及び宗教的に於て認めてゐる。このやうにして私達は今や眞善美及び聖をば、そして若しこれらが正當に次の如く呼ばれ得るものであるなら、即ち文化價值をば、ノウメナの積極的規定として承認することが出来るであらう。そしてこれに従つて、先驗的自由の積極的意義は正しく文化自由に於て理解さるべきであらう。

かゝる觀點の下に於ては、鐵の如き必然的法則に封鎖さるゝ自然は常に必ずしも

單なる自然ではない。道德的行爲が充分なる威嚴に於て道德的意志の創造であつたやうに、藝術的作品も宗教的生活も深き自由に基づく創造であり確固たる實在でなければならぬ。カントは第二批判に於ては上述の如く實踐的を道德的に限つたが第一批判に於てはこの點に多少の動搖が認められ、そのある場所では「實踐的とは自由に依つて可能なる全てのものである」^(a)と云つた。自由とは消極的には自然必然から不拘束と云ふことであるが、積極的には自律を意味する。而して自律的なものは自からに依つて立つ動的なるもの、意志的なものでなくてはならない。目的自體として解せらるべき文化價值は云ふ迄もなく自律的であることを本質とする。かくの如く考ふるならば、上の如く廣義に取られたる實踐的が文化價值の本質となり、意志的と云ふことが全ての實在の根底とならなければならぬ。かく文化價值を動的に考ふことが許されどすれば、それ等は先驗的自由の積極的意義であるべき、實現の自由としての文化自由と融合的緊密に於て結合し、ノウメナの積極的意義は直ちに先驗的自由の積極的意義となり、フイヒテを回顧しつゝ考へられ得るであらうやうに、價值とは直ちに「*Faithandlung*」となり、實在生産の作らきとして、ヘーゲルの深き洞察を想ひ起すなら、それはまた「陰影の王國」^(a)であり、神の創造以前に於けるそ

の本質の現はれ、⁽²³⁾であるであらう。作用の自覺と云ふ意義に於て、カントの峻拒に抵觸しないで、知的直觀がフイヒテの熱説するやうに哲學的方法の唯一の正當に迄高めらるべきであるとすれば、⁽²⁴⁾此のやうな理解が、カント哲學の深い精神にもとることばなしに、云はゞ批判的形而上學の名のもとに承認さるべきやうに感ぜられる。そこではファウストが靈感に満ちて書き記したやうに、—— Im Anfang war die That. と云ふことが正當に *philosophieren* されるであらう。併し乍ら、充分なる準備をなすのへないで餘りに性急にかゝる理解に飛び込むことには、深重なる躊躇を必要としなければならぬ。私は只今のところ唯かゝる考へを一つの憧憬として述べ加へると云ふに止め、この小品の目的は、批判書の前楷に明に現はれてゐると考へられるカントの方法に従ふ限りに於て、何となれば、批判書の中には見過すことの出来ない明らかな表現を以つて屢々フイヒテの自覺が先蹤されてゐるやうに見えるから、ノウメナと先驗的自由とに就て少しく考察を試みたことを以て、達せられたこととした。この二つの概念が有し得べき意義は上の如き理解につきるのでなく、更に惡の問題の困難なる考察に對し、深き暗示を與ふるやうに感ぜられるが、私は未だこの點につき多くの困難を意識する。

註

- (1) Kr. d. r. V. II Aufl. S. 186.
 (2) " S. 562.
 (3) " S. 564.
 (4) " S. 474.
 (5) " S. 565.
 (6) Kr. d. P. V. (Reclan) S. 68.
 (7) Kr. d. r. V. S. 566.
 (8) " S. 569.
 (9) " S. 568.
 (10) Kr. d. P. V. S. 125.
 (11) Kr. d. U-K. (Reclan) S. 36.
 (12) " " S. 567.
 (13) Kr. d. r. V. S. 587.
 (14) Kr. d. r. V. S. 578.
 (15) " S. 59.
 (16) Kr. d. P. V. " S. 832.
 (17) " S. 386.
 (18) Kr. d. r. V. S. 562.
 (19) " S. 828.
 (20) " S. 47.
 (21) " S. 26.
 (22) " " S. 26.
 (23) " " S. 26.
 (24) Fichte. Versuch einer neuen Darstellung der Wissenschaftslehre.